

生活者の省エネルギーに関する意識について

志波 徹

はじめに

2011年3月に起こった東日本大震災から2年が経過しようとしている。原子力発電所が徐々に停止され、電力の需給は厳しい状況が続いている。そのような中、生活者も家庭で何気なく使用していた電力には様々な要因が絡んでいることに気づき、節電の取り組みを始めた人も少なくなっている。

一方で、エアコンの設定温度を上げて、暑い思いをした割に使用量が減らなかつたり、電気のプラグをいちいち抜く行為が面倒であったりするために、省エネルギーの意識や行動に揺り戻しの動きもあるように思われる。また、省エネルギーのメニューや効果に関する情報は、生活者に十分届いているとはいえない。

そのような状況を背景に、CELでは、生活者の省エネルギーに関するライフスタイルの研究を新規に立ち上げた。本稿では、その研究の一環として実施した「生活者の省エネルギーに関する意識や行動に関する調査」の結果の一部を紹介する。

本調査の目的

本調査では、以下の仮説を検証する目的で、調査項目を検討した。

- 省エネに取り組むべきという意識と実際の行動には、乖離があるのではないか？
- 省エネ行動に取り組まない人には、それぞれの理由があるのではないかと？
- 環境への配慮、省CO₂、光熱費削減等、個人によって優先するものは異なるのではないかと？

調査方法はインターネット調査で、対象は、全国の満20歳以上の男女。回収数は、2300人であった。調査時期は、2012年12月である。

省エネルギーの関心と行動

まず、省エネに関する関心を尋ねた。「あなたは省エネに関心がありますか」との問いに対し、「大変関心がある」、「少し関心がある」との回答が81%と大多数を占めた。「少し関心がある」が55%と半数を占めており、それほど積極的ではないが、何かしら取り組んでいると思われるレベルの人が多く、様子が窺える。

男女別で見ると、女性の方が、また年代別で見ると、高齢層の方が「関心がある」が多かった。

また、実際に、今年の夏、どのような省エネ行動をとったかを複数回答で聞いた結果は図1の通りである。「照明やテレビをこまめに消す」、「エアコンの使用を控えて扇風機を使用する」、「エアコンの設定温度を高めにする」の上

位3つの項目は、いずれも半数以上の人が取り組んでおり、省エネの手法として定着しつつあると思われる。

それぞれの省エネ行動について、以前から取り組んでいたか、この夏だけであったかも聞いたところ、前述の上位3つの行動に関しては、以前から取り組んでいた人が41〜47%、この夏から取り組んだ人が7〜8%であった。

また、冷蔵庫は、住宅内で使われる電力消費量の中では、エアコンに次いで大きく、約2割を占めるといわれている。冷蔵庫に関して「物を詰め込まない、開閉を少なくするなど使い方の工夫をした」、「設定温度を高めにした」人は、それぞれ15%程度にとどまっており、あまり実行されていない。冷蔵庫に関する省エネは、夏季に電力会社がCMなどで伝えていたので、実行した人も多いのではないかと考えられたが、意外に低い結果となっている。

図1に示す28の省エネ行動のどれも行っていない人は約7%しかなく、全体としては、9割以上の人が何らかの省エネ行動をしている。しかし、省エネへの関心度とクロス集計してみると、「大変関心がある」、「少し関心がある」と回答している人には、「特に何もしていない」がほとんどなのに対し、「どちらでもない」と回答した人の約2割、「関心がない」と回答した人に至っては8割が省エネ行動をとっていない。省エネに関心があれば、実際に省エネ行動をとるといえる。

これらの省エネ行動は、以前からしていた人に、この夏から取り組んだ人が加わる一方で、しなくなる人もいると思われる。そこで、夏に行った省エネ行動の継続意向を聞いたところ、表1のようになった。

今まで同様、省エネに取り組むとの回答が74%を占め、「今までしていなかったが、秋冬以降は取り組んで行きたい」との回答が6%ある一方で、「今まで取り組んできたが、やめるつもり」との回答が1・7%、「もともととしていないし、今後もするつもりはない」との回答も3・7%あった。全体として、取り組む人の割合が減少しないような方策を考えていく必要がある。

図1 夏季の省エネ行動への取り組み状況 (n=2,300 複数回答)

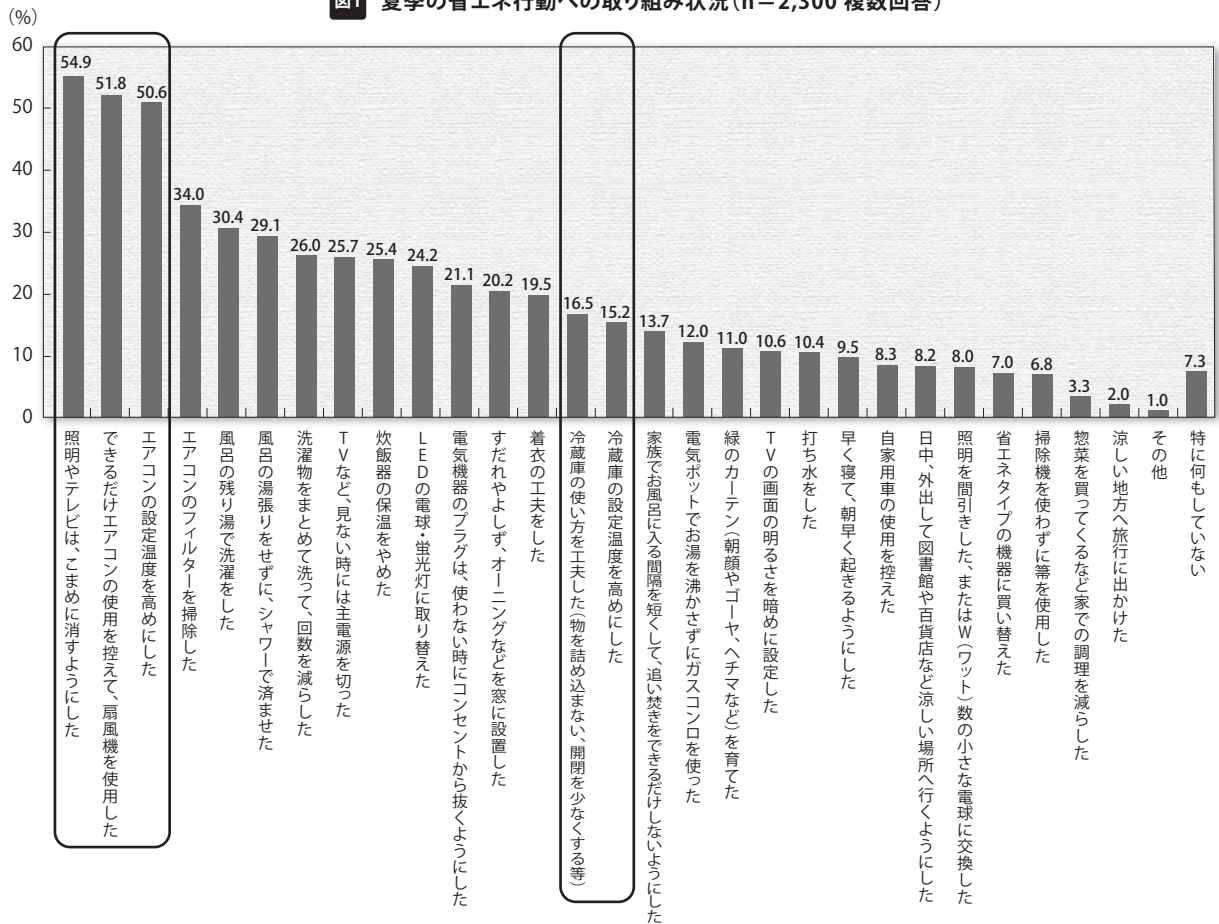


表1 この秋冬以降も省エネを継続していきますか？

今まで同様、省エネに取り組んでいきたい	74.0%
電力の需給が厳しいならば取り組む	7.3%
今までしていなかったが、秋冬は省エネに取り組みたい	6.0%
今まで取り組んできたが、やめるつもり	1.7%
もともとしていないし、今後もするつもりはない	3.7%
わからない	7.2%
(n=2,300)	

表2 省エネ行動をしない理由

人のいない部屋の照明が点灯したままになっていることがある理由	
消灯するのを忘れるから	43.1%
すぐに戻るので、点灯したままにしているから	30.4%
夜、トイレに行く人がいたり、帰宅する人がいたりするので点灯したままにしているから	7.8%
いちいち消灯するのが面倒だから	6.6%
暗いとこわい(不安に思う)ので、点灯したままにしているから	5.7%
省エネにほとんど影響しないと思うから	1.7%
ON・OFFが多いと機器やスイッチが傷みやすいと思うから	1.7%
その他	3.1%

手洗い、歯磨き、風呂などで、水やお湯、シャワーを出しっぱなしにすることはありますか	
次にお湯を出す時に、温度が一時的に変わるのがいやだから	44.3%
いちいち止めるのが面倒だから	30.7%
止めるのを忘れるから	17.9%
省エネにほとんど影響しないと思うから	3.0%
その他	4.1%

冷蔵庫の設定温度を、季節によって変えていない理由	
面倒だから	21.2%
温度が上がって、食品が傷んだり、冷凍したものが溶けたりすると困るから	20.8%
変えるのを忘れるから	20.5%
変え方を知らないから	16.5%
省エネにほとんど影響しないと思うから	13.9%
その他	7.2%

テレビを見終わった時に主電源を切らない理由	
面倒だから	27.9%
次に見る時に、ONするのが面倒と思うから	27.4%
省エネにほとんど影響しないと思うから	15.6%
切るのを忘れるから	11.6%
家族が切るのを忘れるから	5.3%
切り方を知らないから	4.2%
その他	8.1%

省エネ行動をしない理由

省エネ行動をしない人には、それぞれの理由があると思われる。いくつかの行動について、取り組んでいない人に理由を尋ねた。その結果を表2に示す。複数回答で回答を得ているが、延人数を分母にして各回答数の割合を算出している。

「人のいない部屋の照明が点灯したままになっていることがある」と回答した人に対して、その理由を聞いたところ、「消灯を忘れる」という理由が一番多く、4割を超えている。一方で、意図的に点灯したままにしているとの回答もいくらかある。人感センサー付き照明を導入すれば解決するようにも思われるが、照明が不必要な場合でも人が近付けば点灯してしまうこともあるので、効果を考えて導入すべきである。

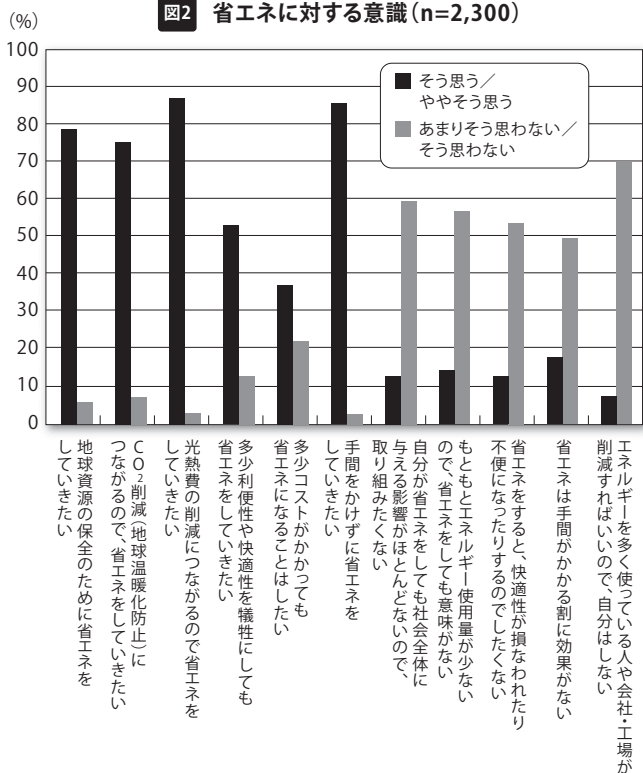
湯や水をこまめに止めない理由に関しては、「お湯の温度が変わるのがい

やである」との回答が半数近くにもなった。湯温調整がしにくいタイプのケランも多いと思われるので、設備の詳細調査も必要であろう。

冷蔵庫の温度設定の変更は、前述のように実施率は15%程度で意外に低かった。変更しない理由としては、「面倒」と「変えるのを忘れる」が多く、両方で40%を超えているが、「食品が傷んだり冷凍の物が解凍したりすると困る」との回答が約20%、「変え方を知らない」が16%、「省エネに影響しないと思う」が13%と少なからずあった。これらは、温度設定の変え方やその時の温度、節電への効果などの情報が伝えられれば、実行に移してもらえらる可能性もあると考える。

テレビを見終わった時に主電源を切っている人は約45%であったが、切っていない人の理由は、「切るのが面倒」と「次に見る時にONしなければいけないのが面倒」の両方を合わせて半数以上になった。通常、リモコンでOFFにするので、さらに手間かけるのは面倒かもしれない。「省エネに

図2 省エネに対する意識 (n=2,300)



省エネ行動に対する意識

影響しないと思う」との回答もあったが、確かにテレビの機種によっては、待機電力がほぼ0まで小さくなっている機種もある。自宅のテレビの待機電力が情報としてあれば、自分の手間と勘案して、生活者自身が主電源を切ることができると思われる。

このように省エネ行動をしない理由として「面倒」が上位を占める結果となった。ここで、もしその行動によるエネルギー削減量や光熱費削減量などの情報を伝えることができれば、面倒という意識を切り崩して、省エネ行動を実行する方向に誘導できる可能性があるだろう。

次に、省エネに対する意識として、11の質問を行い、5段階で回答を

求めた。「そう思う」「ややそう思う」の肯定的意見と、「あまりそう思

わない」「そう思わない」の否定的意見の比較を図2に示す。対比を明確にするために、「どちらでもない」との回答は省いている。省エネに取り組む理由としては、①光熱費削減 ②地球資源の保全 ③地球温暖化防止の順になった。また、「手間をかけずに省エネをしていきたい」については、86%の人が肯定的な意見であり、否定的な意見(「少々手間がかかっても省エネをしていく」は、3%に過ぎなかった。「手間」と感じるかどうかは、個々人の性格や感覚による。それぞれの省エネ行動の効果を伝える情報があれば、自分が許容できる手間で、比較的效果の高い省エネ行動を選択することもできるのではないかと考える。

おわりに

本稿では、今回行った調査の中からトピックス的な事項をご紹介します。他の質問項目についても分析を進め、発信していく予定である。

一般的には、エネルギーの「見える化」で省エネ行動をとるようになるといわれるが、省エネに関心のない人は見ようとならない傾向にあり、同じ「見える化」システムを導入しても消費エネルギーが増加してしまう家庭もある。また、省エネに関する情報が不足で取り組んでいなかったり、間違った省エネをしていたりするケースもあると考えられ、どのような情報が必要なのか、調べていきたい。また、人の個性も様々であり、推奨するメニューも違ったものになると思われる。

今後は、このような調査を継続する一方、実験集合住宅NEXT21において、住戸内で使用するエネルギーの詳細計測や、入居者へのヒアリング調査なども行いながら、生活者のエネルギーに関するライフスタイルがどのようなものであり、今後、どうあるべきかを考えていきたい。

(大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所 研究員)